

Title	地域の祖父母世代の子育て支援動機に関する質的研究
Author(s)	田淵, 恵
Citation	生老病死の行動科学. 13 P.33-P.43
Issue Date	2008
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/6315
DOI	10.18910/6315
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

地域の祖父母世代の子育て支援動機に関する質的研究

A qualitative study for the motivation for participating in child-support activities by grandparental generations

(大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程) 田 潤 恵

Abstract

The purpose of this study was to reveal the motivation for beginning and continuing the child-support activities in grandparental generation. For this purpose, I had semi-structured interviews toward the 22 grandparental generations who engage in child-support activities. The content of the questions was developed in form along the chronological order. As the motivation for beginning, “motivations for common activities” and “motivations only for child-support”, and as the motivation for continuing, “merits for the self”, “contribution for the other”, “contentment of human relationships”, and “good points of activities” were picked up. It is original for the motivations for child-support by grandparental generations that the unselfish motivation categories were picked up as the important ones.

Key word: grandparental generations, motivation for beginning and continuing the child-support activities

I 序論

核家族化が進行し居住地の移動が頻繁に生じる現代社会においては、これまで家庭内、および住み慣れた地域のネットワークが提供してきた子育てに対する支援の受領が困難になってきている（大日向, 2005; 中野, 2005）。その結果、就学前の子どもの養育者、特に母親が、家庭内あるいは地域内で孤立し、育児不安や育児ノイローゼに苦しんでいることが問題となっている（八重樫, 2002）。かつては3世代同居の家庭が多く、家庭内の祖父母が子育てにおいて大きな役割を果たしてきた（Hader, 1965; Dench, Ogg & Thomson, 1999; Michell & Green, 2002; 厚生労働省, 2003; 落合, 1989; 高橋, 1995）。しかし現在、核家族化が進行し、子どもや子育てに関する情報を誰からも教授されず、知識がほとんどないまま養育者となる親が増加している（八重樫・江草・季・小河・渡邊, 2003）。彼らは被養育者から養育者への切り替えができず、親役割を獲得する際に困難を感じている。また、地域内においても、人間関係が希薄化し、インフォーマルな子育て支援を地域において受けることが困難になっている（大日向, 2005）。こうした少子化社会の問題の解決策として提案されているのが、子どもたちにとって祖父母にあたる世代である高齢者の子育て支援である。「平成18年度高齢社会白書」では、地域の祖父母世代が能力や経験を活かし子育て中の母親を支援する取り組みについて、活動機会の拡大や情報提供の強化が課題として挙げられている（内閣府, 2006）。地域の子育て経験者による支援は、子育て中の親世代の不安を解消し、一時的に子育てから解放されることによる親世代の子育てストレスを低減させることにつながる（清水, 2006）。子育て中の親世代を対象に地域の祖父母世代の支援ニーズについて調査を行った結果、5割

以上の人が地域の祖父母世代の積極的な子育てへの関わりを求めており、子どもと遊んでもらうことにより一時的に自身が子育てから解放されることや、祖父母世代の文化を自身や子どもたちに伝達して欲しいといったニーズが高いことが分かった（田淵・中原，2006）。

地域の祖父母世代による子育て支援について、祖父母世代を対象に意識調査を行った結果、約8割の人が支援を行うことに意欲的であることが明らかになった（田淵・中原，2006）。高齢者に社会参加の機会を提供するシルバー人材センター等を通じた子育て支援事業も展開されており、平成17年度の時点で118団体が子育て支援事業を実施している。しかし、社会参加活動としては自身の健康や趣味といった分野に従事する高齢者が多く、「高齢者の地域社会への参加に関する調査」において実際に子育て支援に参加している者は全体の1.9%に過ぎなかった（内閣府，2008）。支援場所の確保や活動予算といったハード面での問題がある一方で、子育てに対する関心や支援への意欲はあるが、実際に行動に移すことが困難である祖父母世代が多い可能性も考えられる。祖父母世代による子育て支援の促進要因として、本研究では特に心理的要因に注目する。

子育て支援を促進する心理的要因として、山下（2004）は支援者の動機付けの側面から研究を行っている。その結果、地域型育児支援における支援者の動機付けとして「専門性の活用」「家族の代替性」「子育て経験の活用」「社会参加」の4つの要素が抽出された。子育て支援に限らず、地域での何らかの支援活動に従事している高齢者の動機研究では、これまで自尊心の維持や自己の成長のためである利己的動機や、他者の利益・幸福のためである利他的動機、社会改善を目指すという社会志向の動機などが挙げられてきた（Fitch, 1987）。福祉ボランティアに関わる際の動機としては、自身の学び、視野の拡大や人間関係の拡大など利己的動機が非常に重要となることが示されている。高齢者が何らかの支援活動に参加する際には、社交性を満たし人間関係を充実させることが動機となっていることが報告されている（Okun & Schultz, 2003）。本研究においても、心理的要因としての動機に着目し、祖父母世代が子育て支援に関わる際の動機を明らかにすることを目的とする。社会の中での役割の獲得や人間関係の充実を目指した社会参加、自身の子育て経験を活かしたいという子育て経験の活用、核家族化などにより血縁の家族に支援できないために地域の子育て支援に参加するといった家族の代替性といった要素が抽出されると考えられる。しかし、支援者が地域の祖父母世代であるという特殊な点から、これまでの研究における子育て支援動機とは異なる新たなカテゴリーが本研究で抽出される可能性がある。

祖父母世代の子育て支援の動機を研究することの社会的意義は、子育て支援を推進する際に祖父母世代の動機を理解しそれを活用した啓発を行えば、祖父母世代の子育て支援を地域で促進できると考えられることにある。祖父母世代による子育て支援を地域に根付かせるためには継続的な活動が必要であり、活動開始のための働きかけと同様、活動継続のための働きかけも重要となる。これまでの動機研究では、何らかの活動における開始の際の動機と、それを続ける際の継続の動機が混同されて用いられることが多いが、速水（1995）は動機研究の中で、開始動機と継続動機を区別し、活動開始初期の外発的動機付けから次第に内発的動機付けに移行することを報告している。また乾・伊田（2003）は通塾という活動の継続動機を、通塾により得られるメリットとして開始動機と区別している。本研究では、子育て支援を開始する際のきっかけを「子育て支援開始動機」とし、更に子育て支援を行うことで得られるメリットを、活動継続の動機となることを仮定して、「子育て支援継続動機」と定義し、

Table 1 対象者の適格基準

a 50 歳から 80 歳であること
b 未就学児（6 歳未満）とその親世代に対する、子育て支援活動に従事していること
c 実子が成人し、日常生活において実子の養育に時間をとられないこと

双方を区分してそれぞれを明らかにすることとする。

II 方法

1. 対象者

1-1. 対象者の適格基準

本研究の対象者は、親世代の子育て支援に従事している地域の祖父母世代である。データの均質化のため、Table 1 に示す適格基準を満たした者を対象とした。

1-2. 調査協力の依頼

調査者はまず、子育て支援施設である A 施設および B 施設の職員に、本研究の目的と内容を説明し、研究への協力を依頼した。協力の依頼は、平成 20 年 1 月下旬におこなった。協力の同意が得られた後、A 施設および B 施設において、上記の適格基準を満たす対象者に本研究の目的と内容を説明し、協力を求めた。そこで了承が得られた対象者に対し、調査を行う日時及び場所を決定した。

1-3. 分析対象者

22 名の協力が得られたため、22 名に対して半構造化面接を行った。面接を行った 22 名の対象者すべてを分析の対象とした。

2. 手続き

2-1. 調査期間

調査期間は、2008 年 1 月 22 日から 2008 年 3 月 14 日であった。

2-2. 調査場所

調査は、A 施設及び B 施設内にて行った。

2-3. 説明と同意

まず、対象者が支援を行う前に、改めて調査の趣旨と内容についての説明を行った。次いで、対象者の支援に参加することについての同意を得、対象者の活動への参加と観察を行った。活動が終了した時点で再度、調査の趣旨、内容、方法を詳しく説明し、また面接への参加は対象者の自由意志に基づくものであること、参加はいつでも取りやめることができること、得られた記録に関しては匿名で使用され、個人のプライバシーが保障されることを説明し、面接の参加について同意を得た上で、面接を実施した。

2-4. 使用機材

面接内容に関しては、録音について許可の得られた 22 名に対し、IC レコーダー（Panasonic RR-71）を用いて記録した。

Table 2 半構造化面接の質問項目

問 1	子育て支援活動に参加されるようになったきっかけは何ですか？
問 2	その活動を始められた頃はどのような感じでしたか？
問 3	現在はどのようなお気持ちでこの活動を続けておられますか？
問 4	これから先、この活動をどのように展開していきたいですか？

3. 調査内容

3-1. 半構造化面接による質問項目

面接は、「子育て支援の開始動機」と「子育て支援の継続動機」を明らかにする目的で、質問項目があらかじめ定められたガイドラインに従って行われた。ガイドラインは、対象者が子育て支援に参加するようになってから、活動を行っている現在までについて、時系列に沿った形で設定した。子育て支援開始から子育て支援を継続している現在まで、対象者が自身のライフストーリーとして回想することで、より過去の心理的状況を語りやすい質問項目とするためである。しかし、面接では話の流れや対象者との雰囲気等を第一に優先し、必要性に応じて質問の順序を適宜変更して行った。質問項目は、Table 2 に示す通りであった。

3-2. 質問紙による質問項目

対象者の属性に関しては質問紙を用い、半構造化面接を行う前に実施した。質問項目は、性別・年齢・世帯構成・就労・子育て支援以外の活動・実子の有無・実孫の有無の7項目とした。

4. 分析方法

4-1. 分析データの抽出

まず、録音された面接内容から、正確な逐語録を作成した。その後、逐語録から、「子育て支援の開始動機」と「子育て支援の継続動機」に関連した文章（発言内容）を抽出した。文章の抽出作業に関しては、主観的判断を避けるため、本研究者が本研究についての説明を行い、共通理解が得られた心理学を専攻する大学院生2名と、本研究者の合計3名によって行った。文章の抽出作業を行う際は、対象者の語られた文脈を重視し、意味の判別ができる単位に文章を分割した。また、抽出された文章が、複数の意味を含まない単独の意味内容から構成されるように分割した。

4-2. カテゴリー分類

抽出された、「子育て支援の開始動機」と「子育て支援の継続動機」に関連した文章に対し、心理学を専攻する大学院生3名によって、KJ法によりそれぞれ内容をカテゴリーに分類した。まず、各文章について、内容の類似点・相違点に基づきカテゴリーに分類し、下位カテゴリーを作成した。そして、それらの下位カテゴリーをより抽象的なカテゴリーに集約し、上位カテゴリーを作成した。

対象者の各発言が、いずれの下位カテゴリーに該当するかということについて、心理学を専攻する大学院生2名が独立に判定を行った。判定は、各下位カテゴリーの定義を参考にして行われた。独立して行われた判定が一致しなかった場合には、議論を行い、両者が納得する結論を得た。

Ⅲ 結果

1. 対象者の属性

対象者の年齢は50歳から73歳までであり、平均年齢は 62.27 ± 5.95 歳であった。対象者22名のうち、「夫婦2人世帯」が11名(50%)、「2世代世帯」が6名(27.3%)、「1人世帯」が2名(9.1%)、「義娘と同居の3世代世帯」が1名(4.5%)、「実娘と同居の3世代世帯」が1名(4.5%)、「義母と同居の3世代世帯」が1名(4.5%)であった。就労については、21名(95.5%)が「専業主婦」で、1名(4.5%)が「パートタイム」であった。本研究で対象とした子育て支援以外の活動については、「定期的に参加している」が10名(45.5%)、「不定期だが何度も参加した」が6名(27.3%)、「1度か2度参加したことがある」が3名(13.6%)、「関心はあるが参加したことはない」が3名(13.6%)であった。実子の有無については、22名(100%)全員が「あり」と回答していた。実孫の有無については、13名(59.1%)が「あり」、9名(40.9%)が「なし」と回答していた。(Table 3)

2. 分析Ⅰ：子育て支援の開始動機

2-1. カテゴリー化とカテゴリー分類

子育て支援の開始動機として、「知人からの勧誘」、「広報」、「活動自体への意欲」、「余暇の活用」、「ボランティアへの興味」、「自分の成長」、「責任の軽さ」、「健康維持」、「子どもが好き」、「今の子育てへの関心」、「親への援助」及び「子育て経験の活用」の12のカテゴリーが抽出された。12のカテゴリー名とそれぞれのカテゴリーにおける発言内容をまとめたものを、Table 4に示す。さらに、抽出された12のカテゴリーは、子育て支援に限らず何らかの活動に参加する際の動機ともなりうる「一般的活動動機」と、子育て支援に特殊に認められる動機と考えられる「子育て支援特殊動機」の2つの上位カテゴリーに分類された。

抽出された発言が、12のいずれのカテゴリーに該当するかということについて、心理学を専攻する大学院生2名が独立に判定を行った。判定は、各下位カテゴリーの定義を参考にして行われた。独立して行われた判定が一致しなかった場合には、議論を行い、両者が納得する結論を得た。判定の一致率は、84.0%であった。

2-2. 各カテゴリーの発言人数

各カテゴリーの発言人数を、Table 5に示す。「一般的活動動機」として、「知人からの勧誘」が9名(40.91%)、「広報」が5名(22.73%)、「活動自体への意欲」が4名(18.18%)、「余暇の活用」が4名(18.18%)、「ボランティアへの興味」が4名(18.18%)、「自分の成長」が2名(9.09%)、「責任の軽さ」が1名(4.55%)、「健康のため」が1名(4.55%)であった。また「子育て支援特殊動機」として、「子どもが好き」が7名(31.82%)、「今の子育てへの関心」が4名(18.18%)、「親への援助」が4名(18.18%)、「子育て経験の活用」が3名(13.64%)であった。

3. 分析Ⅱ：子育て支援の継続動機

3-1. カテゴリー化とカテゴリー分類

子育て支援の継続動機として、「親世代の理解」、「子どもからの恩恵」、「健康維持」、「生きがい」、「親世代への貢献」、「家族への貢献」、「仲間との触れ合い」、「子どもとの触れ合い」、「親世代との触れ合い」、「活動自体の楽しみ」、「活動の負担感」の11のカテゴリーが抽出された。カテゴリーの定義及び内容については、Table 6で示すとおりであった。

Table 3 対象者の属性

対象者	性別	年齢	世帯	就労	子育て以外の活動	子	孫	施設
A	女性	63	夫婦2人世帯	専業主婦	1度か2度参加あり	有	有	A
B	女性	65	夫婦2人世帯	専業主婦	定期的に参加	有	有	A
C	女性	57	1人世帯	専業主婦	参加なし・関心あり	有	有	A
D	女性	60	夫婦2人世帯	専業主婦	定期的に参加	有	無	A
E	女性	63	夫婦2人世帯	専業主婦	定期的に参加	有	有	A
F	女性	63	義娘と同居の3世代世帯	専業主婦	定期的に参加	有	有	B
G	女性	67	夫婦2人世帯	専業主婦	不定期に参加	有	有	B
H	女性	66	2世代世帯	専業主婦	不定期に参加	有	有	A
I	女性	73	1人世帯	専業主婦	不定期に参加	有	有	A
J	女性	63	夫婦2人世帯	パート	1度か2度参加あり	有	有	A
K	女性	70	2世代世帯	専業主婦	不定期に参加	有	有	A
L	女性	50	義母と同居の3世代世帯	専業主婦	参加なし・関心あり	有	無	B
M	女性	68	夫婦2人世帯	専業主婦	定期的に参加	有	無	A
N	女性	67	夫婦2人世帯	専業主婦	定期的に参加	無	無	A
O	女性	68	実娘と同居の3世代世帯	専業主婦	不定期に参加	有	有	A
P	女性	55	2世代世帯	専業主婦	定期的に参加	有	無	B
Q	女性	51	2世代世帯	専業主婦	参加なし・関心あり	有	無	B
R	女性	57	夫婦2人世帯	専業主婦	1度か2度参加あり	有	有	B
S	女性	58	2世代世帯	専業主婦	不定期に参加	有	無	B
T	女性	59	2世代世帯	専業主婦	定期的に参加	有	無	A
U	女性	66	夫婦2人世帯	専業主婦	定期的に参加	有	有	A
V	女性	61	夫婦2人世帯	専業主婦	定期的に参加	有	無	A

Table 4 子育て支援の開始動機カテゴリーの分類

上位カテゴリー	No	カテゴリー	内容
一般的活動動機	1	知人からの勧誘	知り合いから電話等で活動への参加を勧誘される
	2	広報	広報を見て活動を知り、参加する
	3	活動自体への意欲	活動内容を問わず、活動すること自体に意欲がある
	4	余暇の活用	何かしらの活動をする時間が余っている
	5	ボランティアへの興味	ボランティアという行為に対して興味がある
	6	自分の成長	自分の今後のステップアップを望んでいる
	7	責任の軽さ	活動内容の責任が軽い
	8	健康のため	自分の健康維持のため
子育て支援 特殊動機	9	子どもが好き	子どもが好きで、子どもと接していきたい
	10	今の子育てへの関心	現在の子育て方法や親世代・子どもについて知りたい・学びたい
	11	親への援助	親世代の助けになりたい
	12	子育て経験の活用	自分の子育て経験を活かしたい

さらに、抽出された11のカテゴリーは、祖父母世代自身にとってのメリットを感じている「自己へのメリット」、他者へ貢献していると感じている「他者への貢献」、人間関係の充実を感じている「人間関係の充実感」、活動の内容自体に満足している「活動自体の良さ」の4つの上位カテゴリーに分類された。

抽出された発言が、11のいずれのカテゴリーに該当するかということについて、心理学を専攻する大学院生2名が独立に判定を行った。判定は、各下位カテゴリーの定義を参考にし

Table 5 子育て支援の開始動機カテゴリー発言人数

番号カテゴリー	発言した対象者	
	人数	(%)
一般的活動動機		
1 知人からの勧誘	9	40.91
2 広報	5	22.73
3 活動自体への意欲	4	18.18
4 余暇の活用	4	18.18
5 ボランティアへの興味	4	18.18
6 自分の成長	2	9.09
7 責任の軽さ	1	4.55
8 健康のため	1	4.55
子育て支援特殊動機		
9 子どもが好き	7	31.82
10 今の子育てへの関心	4	18.18
11 親への援助	4	18.18
12 子育て経験の活用	3	13.64

Table 6 子育て支援の継続動機カテゴリーの分類

上位カテゴリー	No	カテゴリー	内容
自己へのメリット	1	親世代の理解	今の親世代のことが分かるようになり勉強になる
	2	子どもからの恩恵	子どもと関することで元気をもらう
	3	健康維持	自分の健康維持になっている
	4	生きがい	活動が生きがいになっている
他者への貢献	5	親世代への貢献	親世代の役に立っていると感じる
	6	家族への貢献	実子や孫の役に立っていると感じる
人間関係の充実感	7	仲間との触れ合い	仲間の支援者との触れ合いによる充実感
	8	子どもとの触れ合い	子どもとの触れ合いによる充実感
	9	親世代との触れ合い	親世代との触れ合いによる充実感
活動自体の良さ	10	活動自体の楽しみ	活動内容や活動すること自体が楽しい
	11	活動の負担感	活動が日常生活の負担にならない

て行われた。独立して行われた判定が一致しなかった場合には、議論を行い、両者が納得する結論を得た。判定の一致率は、86.7%であった。

3-2. 各カテゴリーの発言人数

各カテゴリーの発言人数を、Table 7 に示す。「自己へのメリット」として、「親世代の理解」が4名(18.18%)、「子どもからの恩恵」が5名(22.73%)、「健康維持」が2名(9.09%)、「生きがい」が3名(13.64%)であった。「他者への貢献」として、「親世代への貢献」が8名(36.36%)、「家族への貢献」が2名(9.09%)であった。「人間関係の充実感」として、「仲間との触れ合い」が6名(27.27%)、「子どもとの触れ合い」が5名(22.73%)、「親世代との触れ合い」が3名(13.64%)であった。「活動自体の良さ」として、「活動自体の楽しみ」が8名(36.36%)、「活動の負担感」が2名(9.09%)であった。

Table 7 子育て支援の継続動機カテゴリー発言人数

番号カテゴリー	発言した対象者	
自己へのメリット	人数	(%)
1 親世代の理解	4	18.18
2 子どもからの恩恵	5	22.43
3 健康維持	2	9.09
4 生きがい	3	13.64
他者への貢献		
5 親世代への貢献	8	36.36
6 家族への貢献	2	9.09
人間関係の充実感		
7 仲間との触合い	6	27.27
8 子どもとの触合い	5	22.73
9 親世代との触合い	3	13.64
活動自体の良さ		
10 活動自体の楽しみ	8	36.36
11 活動の負担感	2	9.09

IV 考察

1. 子育て支援の開始動機

地域の祖父母世代の、子育て支援の開始動機について分析した結果、子育てに限らず何らかの活動をしたくて支援を開始したという「一般的活動動機」と、子育て支援を行いたいという「子育て支援特殊動機」という2つの上位カテゴリーが抽出された。従って、子育てに関わりたいと考えて支援を開始した人がある一方で、子育てに限らず何らかの活動がしたくて支援活動を開始した人もいる可能性が考えられる。

「一般的活動動機」では、「知人からの勧誘」カテゴリーの発言人数が多い結果となった。従って、地域における対人関係ネットワークが、祖父母世代が支援活動を行う際に非常に重要となってくることが考えられる。地域型育児支援における支援者の動機を調べた先行研究では類似したカテゴリーは認められなかったが、内閣府（2006）による「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査」において「友人・仲間のすすめ」が高齢者の社会参加活動開始動機として最も高い割合となっており、本研究と同様の結果となっている。また、「一般的活動動機」では、「余暇の活用」、「ボランティアへの興味」、「自分の成長」といった、自分自身の成長や幸福を望む下位カテゴリーで構成されていた。

一方、「子育て支援特殊動機」では、「親への援助」といった利他的動機が含まれていた。「一般的活動動機」と比較して、自身のメリットのみではなく親世代の幸福を動機とするカテゴリーが含まれることが、「子育て支援特殊動機」の特徴のひとつであると考えられる。

「親への援助」カテゴリーは、山下（2004）における「家族の代替性」カテゴリーと一部類似する点を持つ。つまり、実子と別居しており実子の子育てを直接的に支援できないため、地域に住む身近な子育て中の親世代を援助したい、というものである。地域の祖父母世代に

とって、親世代は実子と同世代であり、自身の経験や知識を直接伝えていく世代である。そのため、支援を必要とする状況にある親世代に対して、直接的に役立つことを求めて支援に参加すると考えられる。子育て支援という活動内容が、福祉ボランティア活動に認められる利他的動機を含んでいること、そして特に祖父母世代という立場から、親世代や子どもといった次世代への貢献への希望を含んでいることが分かる。

山下（2004）で抽出された「専門性の活用」と類似するカテゴリーは抽出されなかったが、これは本研究の対象者が保育士や幼稚園教諭といった就学前の子どもに関する専門的な資格を有していないことを意味している。若年層や中年層の子育て支援グループは、子どもに関する専門的な資格を有する者が比較的多く所属しているのに対し、祖父母世代といった高齢の支援者グループは専門性が偏らずより幅広い人材で構成されていることが反映された結果であると考えられる。

2. 子育て支援の継続動機

子育て支援の継続動機としては、「自己へのメリット」、「人間関係の充実感」、「活動自体の良さ」といった、自己への直接的・間接的メリットが動機となっているものと、「他者への貢献」といった利他的動機が抽出された。

「自己へのメリット」では、「親世代の理解」や「子どもからの恩恵」といったカテゴリーの発言が多く見られた。支援活動を行っていく中で、祖父母世代の中で親世代を理解できるようになったとの実感が生まれ、そのことが子育て支援活動を続ける動機となっていることが分かる。祖父母世代による子育て支援の際の問題点について意識調査を行った結果、約7割の人が親世代と育児方針や育児方法が異なることを案じており、世代間理解が支援の際の課題のひとつとなることが考えられた（田淵・中原，2006）。本研究の結果から、支援を行っていく中で、祖父母世代における親世代の理解が進む可能性が示唆された。また、子どもに対しては、理解や貢献ではなく、祖父母世代自身が恩恵を受けていると感じていることが明らかとなった。具体的発言例としては、「子どもから元気をもらった」「子どもと接すると活力がわく」といった発言が認められ、就学前の子どもと接することにより得られる精神的健康感が祖父母世代の支援継続動機となっていると考えられる。

「人間関係の充実感」の継続動機カテゴリーは、祖父母世代の子育て支援に限らず、地域におけるシニアボランティア活動の参加に見られる動機である（Okun & Schultz, 2003）。人間関係の幅が同世代（祖父母世代）・親世代・子ども世代の3世代に及んでいることが、本研究で抽出された子育て支援動機の特長点である。異なる世代の人との人間関係の充実が活動の継続動機となる点で、本研究で取り上げた地域の祖父母世代による子育て支援の枠組みは、祖父母世代がボランティアとして教育支援や絵本の読み聞かせなどの知的活動のために学校を訪問するといった世代間交流事業（堀，2001；藤原・西・渡辺・李・井上・吉田・佐久間・呉田・石井・内田・角野・新開，2006）と類似している。各地で行われる世代間交流事業では、主に子どもとの人間関係が祖父母世代の活動動機となっていると考えられるが、本研究で取り上げた子育て支援では親世代への貢献感が継続動機となっていることが、発言人数の多さから推測できる。地域での人間関係において、近年、異なる世代間の人間関係が希薄になってきていることが指摘されている。特に、祖父母世代と親世代、祖父母世代と子ども世代といった、世代間の交流が家庭内や地域で減少している（嵯峨座，2001）。本研究で

取り上げた地域の祖父母世代による子育て支援の枠組みが、同世代のみならず世代間の人間関係を広げることに寄与する可能性が考えられる。世代間の人間関係を広げる活動としては、祖父母世代がボランティアとして教育支援や絵本の読み聞かせなどの知的活動のために学校を訪問するといった世代間交流事業が各地で展開されている（堀，2001；藤原ら，2006）。本研究の枠組みは、そうした世代間交流という視点でも非常に価値のある活動となっていると考えられる。

「他者への貢献」のカテゴリーでは、親世代への貢献について発言人数が多かった。支援開始動機においても親への援助カテゴリーが抽出されたことから、親世代に対する直接的な支援についての関心が高いことが示された。本研究の対象者はほぼ子育て経験者であることから、より親世代に共感することができ、親世代への支援の必要性を強く感じていたことが考えられる。

V 本研究の課題

本研究では、地域の子育て支援という場に集まる祖父母世代の、開始動機と継続動機について明らかにすることができた。祖父母世代の子育て支援独自の活動動機として、次世代に対する関心や貢献感のカテゴリーが抽出されたことが、本研究の意義であると考えられる。本研究では開始動機と継続動機についてそれぞれのカテゴリー抽出を行ったが、開始動機により、継続する支援活動の内容の質的な相違が認められる可能性もある。例えば、支援開始時に子どもや親世代への貢献感や関心といった動機の強い人は、より子どもや親世代への直接的な関わりを求めた支援内容となることが予測される。一方、知人による勧誘が開始の強い動機となった人は、子どもや親世代よりも同じ活動を行う仲間との関係を重視するため、仲間と多く触れ合うことができる活動内容を好んだり、選択したりする可能性がある。開始動機と質的な活動内容との関係を今後明らかにすることで、地域の祖父母世代による子育て支援の実態をより詳しく検討できると考える。また、本研究は横断的調査であったが、縦断研究を行うことで、更に詳しく支援開始動機と継続動機について検討することができ、より具体的な介入方策を提案できると考える。

引用文献

- Dench, G., Ogg, J. & Thomson, K. 1999 The Role of Grandparents. In: British Social Attitudes: The 16th Report. Ashgate Publishing, Hampshire.
- Fitch, R. T. 1987 Characteristics and Motivations of College Students Volunteering for Community Service. *Journal of College Student Personnel*, **28** (5), 424-431.
- 藤原佳典・西真理子・渡辺直紀・李相侖・井上かず子・吉田裕人・佐久間尚子・呉田陽一・石井賢二・内田勇人・角野文彦・新開省二 2006 都市部高齢者による世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム：“REPRINTS”の1年間の歩みと短期的効果 日本公衆衛生雑誌 **53** (9), 702-714.
- Hader, M. 1965 The Importance of Grandmothers in Family Life. *Family Process*, **4**, 228-240.
- 速水敏彦 1995 外発と内発の間に位置する達成動機づけ 心理学評論, **38**, 171-193.
- 堀勝洋 2001 世代間関係の変化 嵯峨座晴夫編 少子高齢社会と子どもたち 児童・生徒

- の高齢化問題に関する意識調査を中心に 中央法規 Pp.24-38.
- 乾真希子・伊田勝憲 2004 学習塾の機能に関する心理的検討の試み：通塾開始動機・通塾継続動機の自由記述と満足度の関係 心理発達科学論集, **33**, 1-9.
- 厚生労働省 2003 子育て支援等に関する調査研究
- Kuhne VS (eds.) 1999 Intergenerational Programs; Understanding what we have created. *Haworth Press, New York*. Pp.457-486.
- Michell, W. & Green, E. 2002 'I don't know what I'd do without Mam'. Motherhood Identity and Support Networks. *The Sociological Review*, **50**, 1-22.
- 内閣府 2006 高齢社会白書
- 内閣府 2008 高齢社会白書
- 中野洋恵 2005 ジェンダーと子育て① 子どもを育てるのは女性 大日向雅美・荘舜哉編 子育ての環境学 実践子育て学講座 3 大修館書店 Pp.176-177.
- Okun, M. A. & Schultz, A. 2003 Age and Motives for Volunteering: Testing Hypotheses Derived From Socioemotional Selectivity Theory. *Psychology and Aging*, **18**(2), 231-239.
- 大日向雅美 2005 第4章 子育ての変遷と今日の子育て困難 大日向雅美・荘舜哉編 (編) 子育ての環境学 実践子育て学講座 3 大修館書店 Pp.92-112.
- 落合恵美子 1989 育児援助と育児ネットワーク 家族研究, **1**, 109-133.
- 嵯峨座晴夫 2001 少子高齢化の人口動態 嵯峨座晴夫編 少子高齢社会と子どもたち 児童・生徒の高齢化問題に関する意識調査を中心に 中央法規 Pp.2-13.
- 清水美知子 2006 シニア世代による子育て支援の実践 -加古川市「にこにこオープンルーム」を事例として- 関西国際大学研究紀要, **7**, 115-123.
- 田渕恵・中原純 2006 祖父母世代による子育て支援の可能性の検討 生老病死の行動科学, **11**, 53-62.
- 高橋博子 1995 育児をめぐる世代間交流 青木和夫 (編) 高齢化社会の世代間交流 長寿社会開発センター, Pp.84-115.
- 八重樫牧子 2002 母親の子育て不安の程度と母親クラブ活動との関連性に関する考察 川崎医療福祉学会誌, **12**(1), 45-57.
- 八重樫牧子・江草安彦・李永喜・小河孝則・渡邊貴子 2003 祖父母の子育て参加が母親の子育てに与える影響 川崎医療福祉学会誌, **13**(2), 233-245.
- 山下重紀子 2004 育児支援者の動機付けに見る地域型育児支援の展望 国立女性教育会館研究紀要, **8**, 39-50.